

一滴の水
も千金の
價

葉爾羌へ
の岐路

かを知るに足る。又降雪は極めて少きも、北風強きを以て、寒氣從つて烈しく、且つ
氣温稍々整へば、蠅蚊の類の跋扈する有りて其煩なる名狀し難しと云ふ、豈不幸の
地と謂はざるべけんや。不幸は尙ほ之に止まらず、其の飲用水は遠く喀喇噶爾河
の河水を溝渠に依て導きたれば、寒冷の際は兎に角、夏期に在りては、水恰も温湯と
化し、塵埃之に混して、到底飲むべくもあらず。然れども之を措きては他に求むべ
き無きが故に土民は平然飲み且つ用ゆ。予の此地に入るや官憲先づ贈るに水を
以てす。蓋し喀什噶爾河の上流、此を距る十餘里の處より運び來りしものと。其
の一滴も實に千金の價ありと謂ふべし。

二 大渠の龍口を過ぐ

三十一日滞在八月一日發タラシヨトチユルカイに小憩し行程九里餘屈爾蓋チユルカイに到る。此間
前半路は良好なるが、後半路は灰塵甚しく、且つ一般に晝間虻蠅夥し。卡拉克沁カラクチンへ
は其東里餘の處より、南に迂回する小路ありて、水多きも車輛通せず。大路は之よ